

日英語の新聞社説における接続表現

一文の接続をめぐって

西 由美子

要 旨

本研究は日本語教育の基礎的研究として、日英対照研究の立場から接続表現の機能を探るべく、日英語の新聞社説における接続表現について量的・質的分析から考察を試みるものである。本稿では主として量的分析から明らかになったことを報告する。

日本語の新聞社説とその英訳、および英語の新聞社説において文の接続を担う接続表現の出現傾向を分析した結果、日英語の新聞社説における接続表現の出現傾向には共通性が見られ、社説における接続表現の役割は日英語で大きく異なるものではないことが明らかとなった。ただし、個々の接続表現を日英語で対照させてみると、その対応関係は必ずしも一対一ではなく、そこに日英語の接続表現が担う機能の異質性が観察されるのであるが、このような質的分析に関しては紙面の都合上、稿を改める。

[キーワード] 接続表現 日英対照 新聞社説 文の接続

1 はじめに

本研究は、新聞社説における叙述内容の接続にどのような言語形式が使用されているのかをデータベースを基に客観的に把握し、日英語の論理的文章における接続表現の機能を探ることを目的とする。このようなテキスト分析を日英対照研究の立場から行うことにより、叙述内容の「接続」に関する言語運用の一面が観察できる。これは、異なる言語を使用する人間の論理的思考が言語表現にどう反映しているかを観察することでもあり、日本語学習者が母語と日本語の論理構造を客観的に認識するうえで有益な示唆を与えるものと思われる。

接続表現の規定と範囲について、佐久間まゆみ(1992)は次のように定義している。

「接続表現」とは、文章論における「接続語句」に当たるものであるが、品詞論における「接続詞」「接続助詞」や構文論における「接続語」「接続句」に対する用語であって、その取り扱う範囲のやや広いものである。文字資料のみならず、音声資料における「つなぎ語」一般を対象として

考えると、いわゆる「接続語句」と比べても、さらに範囲が広い。接続詞に類する働きを持つ副詞的表現や名詞的表現、連語的表現、句・節・文レベルの表現形式までが含まれることになる。(p.9)

本稿も基本的にこの定義を支持するが、その領域が広範であることから、調査対象は接続表現の中でも「文の接続¹⁾」を担う接続詞・接続連語及びそれに準ずるものに限定した。

英語の接続表現については、Connectivesのうち、Conjunction, Conjunctive, Conjunctive Adverbが調査対象に含まれる。接続する言語単位としてはsentenceの接続を担うものとする。なお対照分析の複雑化を避けるため以下の表現については調査対象から外した。

- 1) Conjunction の *if*, 2) Relative Pronoun の *who, which, when where*,
- 3) Conjunction の *when*, 4) Group Conjunction (*as if, in order that* 等),
- 5) Correlative Conjunction (*both...and, not only...but* 等)

接続表現の分類にあたっては、市川孝(1978)の「文の接続類型」の枠組みを使用する。但し、連鎖型は接続表現の介在するところでないため、本稿では連鎖型を除く七類型を分類の枠組みとする。

- (1)順接型 前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型。
- (2)逆接型 前文の内容に反する内容を後文に述べる型。
- (3)添加型 前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型。
- (4)対比型 前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型。
- (5)転換型 前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型。
- (6)同列型 前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型。
- (7)補足型 前文の内容を補充する内容を後文に述べる型。
- (8)連鎖型 前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型。(接続語句は普通用いられない。) (pp.89-93)

2 研究方法

文の接続を担う接続表現を日英語で比較するにあたり、本稿では次の二つの調査を行った。分析資料にはいずれも社説を用いたが、これは新聞社説が、1)一般的に論理的文章の代表とされる論説文の一つである、2)他の種類の文章に

*1 文の接続には、文以上の言語単位である連文・段落の接続も含まれる。

比べ接続表現が多く使用される傾向がある（佐久間 1979, 樺島・寿岳 1965）、3) 1 文章の長さがほぼ一定している、4) テーマに極端な偏りが無い、といった文章特性をもつことから、量的、質的な分析に耐えるものと判断したためである。また社説の執筆には複数の論説委員が関わっているため²⁾、個人差による偏りもある程度は捨象されるものと思われた。

2.1 調査1

調査1は、日本語の社説およびその英訳における接続表現の出現傾向を明らかにすることを目的とする。調査資料として英訳を用いた理由であるが、これは日英語の接続表現の機能を比較するうえで、文脈をできる限り等質に揃えたかったことにある。同じ内容が二つの言語でどのように表されるか、つまり同じ情報がどのような表現形式をもってどのように接続されているのかを比較するためには、翻訳を用いて情報を制限する必要があると考えた。1991年8月から12月に掲載された朝日新聞の社説の中から100文章を選定し、それらの英訳100文章とを合わせた計200文章を分析資料とした。選定の基準は、文章の情報量をできる限り揃えるため、1文章あたりの情報量（文字数）が1450～1550であること、またAsahi Evening Newsに翻訳が掲載されているものとした。日本語の社説に出現した接続表現を文の接続類型に分類し、その出現傾向を英語の接続表現の出現傾向と比較した。英語の接続表現については接続類型による分類は行っていないが、これは英語の資料が日本語の翻訳であることから不要であると判断された。英訳における接続表現は、その表現は異なれど日本語の社説と文脈を等しくしており、自ずと日本語の接続表現と同じ種類の接続表現が使用されるものと思われるためである。なお、調査資料とした日本語の社説及びその英訳は、日外アソシエーツ発行の電子ブック「朝日新聞－天声人語・社説 1985-1991 増補改訂版」に収録されており、本調査ではそのデータを使用した。またデータの分析にあたってはコンピュータプログラム「フルテキストアナライザー」³⁾を使用した。

*2 執筆過程等については朝日新聞社に電話のうえ確認を得た。

*3 このプログラムは大量の言語データを一括して処理するために、佐伯巖氏（(株)リコー）が慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの小林栄三郎研究室と共同で開発したものである。

2.2 調査2

調査2も調査1と同じく文の接続を担う接続表現を日英比較分析するものであるが、分析資料を異にする。調査1では翻訳された文章を扱ったため、本来の英語の文章とは異なり、調査結果が何らかの影響を受けている可能性があると言及される恐れもある。そこで調査2ではThe New York Timesの社説を比較の対象資料とした。1992年6月に掲載された朝日新聞の社説56文章と、同時期に掲載されたThe New York Timesの社説56文章、計112文章における接続表現の出現傾向を日英語で比較した。日英語の文章は内容的に全く異なるものであるが、日英語の社説において使用される接続表現について文体論的立場から比較分析を行った。なお調査2においては英語の接続表現についても市川の接続類型による分類を試み、その上で接続類型別の出現傾向を日本語と比較した。

3 分析結果および考察

3.1 調査1 文の接続—日本語の社説とその英訳において—

日本語の社説とその英訳において文を接続する接続表現の出現傾向をまとめる。3.1.1では日本語の社説における接続表現について、3.1.2では英訳における接続表現の出現傾向について述べ、3.1.3で両者を比較する。

3.1.1 日本語の社説における接続表現

【表1】は日本語の接続表現の接続類型別の出現傾向を出現箇所別にまとめたものである。なお、本稿では複数の調査結果を比較する都合上、文頭出現の接続表現を分析対象とし、文中出現の接続詞・接続連語等については言及を控える。

社説100文章中に出現した文頭箇所の接続表現の総数は407であった。これは総文数2979の13.7%にあたる。つまり社説一文章あたりの接続表現の数は4.07で、1文章につき平均4つの接続表現が使用されていることになる。

次にどのような接続表現が使用されているのか、全接続表現407例の接続類型別の割合をみてみたい。出現率が最も高いのは逆接型の212例で、総文数に対する出現率は7.1%であった。逆接型の接続表現は全接続表現407例の52.1%を占める。逆接型の接続詞は、前件から予想される内容に反する内容が後件に述べられる時、その論理的関係を明示するものであり、理想に対しての不本意

【表1】日本語の接続表現の接続類型別出現傾向

(1)

接続類型	接続表現	文章全体	出現箇所			
			文頭出現の接続詞類			文中出現の 接続詞類
			文頭全体	段落区分	段落内部	
	接続表現総数	499 (100%)	407 (100%)	175 (100%)	232 (100%)	92 (100%)
順 接 型	この結果	2	2	2	0	0
	このため	2	2	1	1	0
	これで	1	1	0	1	0
	したがって(従って)	9	8	4	4	1
	そこで	5	5	1	4	0
	その結果	3	1	0	1	2
	そのために	3	2	0	2	1
	そのためには	3	3	1	2	0
	そのためにも	1	1	0	1	0
	それだけに	9	9	5	4	0
	それで	1	0	0	0	1
	それには	2	2	0	2	0
	だから	3	3	2	1	0
	だからこそ	1	1	0	1	0
では	1	0	0	0	1	
とすれば	1	1	1	0	0	
とすれば	2	2	0	2	0	
小計	① 順接型	49 9.8%	43 10.6%	17 9.7%	26 11.2%	6 6.5%
逆 接 型	が	7	7	0	7	0
	けれども	2	2	1	1	0
	けれども	1	1	0	1	0
	しかし	115	115	45	70	0
	それが	2	2	0	2	0
	それでも	4	4	2	2	0
	それにしても	1	0	0	0	1
	それにもかかわらず	1	1	1	0	0
	だが	54	54	21	33	0
	だからといって	2	0	0	0	2
	ところが	12	12	6	6	0
	とはいえ	6	6	6	0	0
	とはいっても	1	1	1	0	0
にもかかわらず	7	7	4	3	0	
小計	② 逆接型	215 43.1%	212 52.1%	87 49.7%	125 53.9%	3 3.3%
添 加 型	あわせて	1	1	0	1	0
	さらに	13	9	3	6	4
	さらには	3	1	0	1	2
	しかも	17	13	6	7	4
	そして	17	7	0	7	10
	それどころか	1	1	1	0	0
	それに	5	1	1	0	4
	そればかりか	1	1	0	1	0
	それも	2	2	0	2	0
	同時に	13	7	3	4	6
と同時に	1	1	1	0	0	
また	40	27	12	15	13	
小計	③ 添加型	114 22.8%	71 17.4%	27 15.4%	44 19.0%	43 46.7%

(2)

接続類型	接続表現	文章全体	出現箇所			
			文頭出現の接続詞類			文中出現の 接続詞類
			文頭全体	段落区分	段落内部	
対 比 型	あるいは	5	0	0	0	5
	一方	11	11	8	3	0
	一方で	9	5	4	1	4
	一方では	1	0	0	0	1
	かえって	5	0	0	0	5
	逆に	1	0	0	0	1
	これに対して	2	2	2	0	0
	その一方で	1	0	0	0	1
	それとも	1	0	0	0	1
	対して	1	1	0	1	0
	他方	5	5	5	0	0
他方で	2	0	0	0	2	
まして	1	1	0	1	0	
むしろ	12	5	1	4	7	
計	④ 対比型	57 11.4%	30 7.4%	20 11.4%	10 4.3%	27 29.3%
転 換 型	いずれにしる	2	2	1	1	0
	さて	1	1	1	0	0
	そもそも	2	2	2	0	0
	それにしても	1	1	0	1	0
	とにかく	1	1	0	1	0
	ともかく	1	0	0	0	1
	ひるがえって	1	1	1	0	0
計	⑤ 転換型	9 1.8%	8 2.0%	5 2.9%	3 1.3%	1 1.1%
同 列 型	いわば	2	1	0	1	1
	少なくとも	2	2	0	2	0
	せめて	1	0	0	0	1
	たとえば (例えば)	13	9	2	7	4
	つまり	6	3	1	2	3
	つまりは	1	1	0	1	0
	とくに (特に)	9	9	4	5	0
	とりわけ	5	3	0	3	2
要するに	1	0	0	0	1	
計	⑥ 同列型	40 8.0%	28 6.9%	7 4.0%	21 9.1%	12 13.0%
補 足 型	それというもの	1	1	1	0	0
	ただ	5	5	3	2	0
	ただし	4	4	3	1	0
	というもの	3	3	3	0	0
	もつとも	2	2	2	0	0
計	⑦ 補足型	15 3.0%	15 3.7%	12 6.9%	3 1.3%	0 --

な現状や、対立意見に対する筆者の主張を明確にうちだすために効果的に使われているようである。文末の述定形式との呼応によって、後件が強調の意を帯びる場合もあるが、接続表現と文末の述定形式との呼応関係がもたらす表現効果については今後の課題としたい。次いで、出現率第2位は添加型の71例であった。自分の主張に説得力をもたせるためには、事実を客観的に把握して提示したり、物事を多角的に捉え説明することが必要となるが、添加型の接続詞はこれらの点で有効に働くものと考えられる。第3位以下は、順接型の43例、対比型の30例、同列型の28例、補足型の15例、転換型の8例の順となっている。

接続類型別の出現傾向は出現箇所別にみてもほぼ同じ傾向にある。段落区分箇所と段落内部共に、逆接型、次いで添加型の接続表現の出現率が高く、転換型の出現率が最も低い。順接型、対比型、同列型、補足型については出現箇所によって順位が多少前後するが、数値からみて有意差はないものと推測される。

次に表現別の出現傾向であるが、出現率の高い順に、第1位が「しかし」の115例、第2位が「だが」の54例、第3位が「また」の27例となっている。上位2位が逆接型の接続表現で、その出現数を合計すると169例となり、全接続表現407例の41.5%を占めることになる。社説において「しかし」や「だが」を使用することの有効性が窺える。

なお、転換型の接続表現は出現率が最も低いが、その用例を見てみると数は少ないながらも種の重要な役割を果たしていることが観察される。社説における転換型の接続表現は、話題が変わるといった大きな内容の転換を示すものではなく、むしろ「一方」などの対比型の用法に近く、同じ話題の中での筆者の視点の移動を明示するために使用されているようである。対比型の接続詞との入れ換えも可能である。このような転換型の接続詞の用法がみられるのは、社説が一つのテーマのもとに書かれていること、また文章の長さ強い制約があり大きく話題を転換させることが少ないという文章特性によるものであろう。また、「いずれにしろ」や「そもそも」は、前件と後件の論理的関係を示すというより、むしろ物事に対する筆者の主観が強く現れた表現であるといえる。複雑化した議論を筆者の視点からまとめあげる際に使用されており、その直後に筆者の主張がはっきりと述べられている。

3.1.2 英訳における接続表現

【表2】は英訳 100 文章における接続表現の出現傾向をまとめたものである。接続表現は出現数の多い順に並べてある。文の接続を担う接続表現は英語の場合も通常は接続される 2 文の間、つまり後続文の文頭に位置するが、場合によって後続文の主語が文頭に位置し、接続表現が文中に挿入されることがある。その場合は文中出現でも文頭出現とみなして集計し、【表2】の（ ）内にその数値を示した。文頭に位置し文の接続を担う接続表現は 100 文章中に 353 例みられた。その異なり語数は 28 で、計 28 種類の接続表現が文間文脈で機能している。なお、英語の接続詞には等位接続詞と従位接続詞の区別があるが、文の接続を担う接続詞はいずれも等位接続詞に属するものである*4。

文頭箇所全体では、最も多く出現した接続表現は *but* で 132 例みられた。続いて第 2 位が *however* の 77 例、第 3 位が *and* の 38 例である。第 3 位以下には *moreover, for, and yet, besides, therefore* 等が挙げられている。第 1 位の *but* には逆接型・対比型、第 2 位の *however* には、逆接型・転換型の用法があるが、いずれも逆接型の用法として多く用いられる傾向がある。両者の出現数を合計すると 209 例（接続表現総数 353 例の 59.2%）で、*but* と *however* の 2 種の接続表現が、文間文脈で機能する文頭出現の接続表現総数の 60% 近くを占めていることになる。文間文脈には、*but* や *however* といった、前件と後件の従属度が低い逆接型や転換型の接続表現が多く出現する傾向があるといえる。

次に段落区分箇所における接続表現の出現傾向をみてみたい。段落区分箇所に現れた接続表現の総数は 103 例で、その異なり語数は 16 である。段落区分箇所に最も多く出現した接続表現は *however* で 33 例見られた。ただし、この内の 22 例は文間文脈の接続を担うものの、厳密には文頭に位置していない。*however* は、他の接続表現と異なり「文の中間または終わりに用いることが多い（『新英和大辞典』研究社）」とされるが、社説における *however* の使用においてもこうした傾向がみられることが確認された。なお、段落区分箇所において *however* に次いで多く出現した接続表現は *but* であるが、*but* の出現数は 31 で *however* の出現数 33 と殆ど差がない。従って、段落区分箇所においては

*4 従位接続詞が文間文脈で使用されることも稀にあるが、本調査のデータにはそのような例は見られなかった。

【表2】英語の接続表現の出現箇所別出現傾向(()は内数を示す)

出現 数 順 位	出現箇所	文頭箇所全体	段落区分箇所	段落内部
	接続表現総数	353	103	250
	異なり語数	28	16	26
1	but	132	31	101
2	however	77	33 (22)	44 (28)
3	and	38	8	30
4	moreover	13	4	9 (1)
5	for	12	0	12
6	and yet	9	8	1
6	besides	9	3	6
6	therefore	9	1	8 (7)
9	yet	7	2	5
10	nevertheless	6	3	3
11	for example	4	1	3
11	in other words	4	0	4 (1)
11	meanwhile	4	2	2 (1)
11	thus	4	2	2
15	also	3	0	3
15	otherwise	3	0	3
17	but still	2	2	0
17	for instance	2	1	1
17	in addition	2	0	2
17	instead	2	0	2
17	or	2	0	2
17	still	2	1	1
17	then	2	0	2(2)
24	and anyway	1	1	0
24	and so	1	0	1
24	at the least	1	0	1
24	hence	1	0	1
24	so	1	0	1
29	whereas	0	0	0

however, but の2種の出現率が高いとってよかろう。however と but の用例を合わせると計 64 例となり、これは段落区分箇所における接続表現総数 131 例の 48.9%にあたる。「段落」は文章の最大構成要素といえるが、その冒頭位置

に *but* や *however* といった逆接の用法を主とする接続表現が多く使用されるということから、これらの接続表現は話題の展開等の文章の大きな流れにおいて、何らかのかたちで有効に働いているものと予想される。段落内部の接続表現の出現傾向は、文頭箇所全体の接続表現の出現傾向と一致しており、*but*, *however*, *and* の順で出現数が多かった。

なお、英語圏の国語教育（作文指導）においては、文間文脈の接続における *and*, *but* の使用、つまり文頭に *and* や *but* をたてて文を始めることは好ましくないとされているようであるが、本調査では文頭に *and* や *but* をたて前文とを接続するという例が多数みられた。社説の翻訳者に日本語母語話者が多いことが影響したものかとも思われたが、文頭出現の *and* や *but* は調査 1 のみならず調査 2 の *The New York Times* の社説にも多く見られた。教育現場で指導される作文の規範と人間の言語使用における自然な思考の流れは一致しないことが予想される。これらの文頭の接続表現は会話においても多用され、単に前件と後件の論理関係を示す以外の機能をもつことが指摘されている(Schiffrin1987)。社説は書かれた論理的文章といえども読者に「語りかける」という性質をもっており、その意味では口語文体的な要素を含む可能性もあるが、これについては今後更に分析を重ねていきたい。

3.1.3 日英語の接続表現の出現傾向

ここで調査 1 の結果得られた日英語の接続表現の出現傾向を比較分析する。日本語の社説が英訳されるにあたって、100 文章の総文数は 2979 から 3115 に増えているが、100 文章に使用された文間文脈の接続を担う接続表現総数は 407 から 353 に減っている。接続表現を持つ文の全箇所数に対する割合をみると、文章全体では、日本語が 13.7%であるのに対し、英語は 11.3%となっている。社説一文章あたりの接続表現数では、日本語が平均 4.07、英語が平均 3.53 となっている。同じ情報量を持つ日本語と英語の文章を比べると、文間文脈で機能する接続表現の出現率は、日本語の方がやや高いことが明らかとなった。これは翻訳の際に一部の接続表現が訳出されなかったことを示しているが、訳出されないものには順接型、次いで添加型のものが多かった。順接型の接続関係においては前件と後件の「条件」と「帰結」あるいは「原因」と「結果」の関係が明らかであれば、必ずしも接続表現を伴わなくても伝達上支障はないものと予想される。また添加型については、そもそもある事柄を述べたあとに別

の事柄を述べるという言語行為そのものが「情報を付け加える」という性質をもつ以上、接続される二つの叙述内容の関係は、接続詞という有標の接続形式をとらなくても伝達されることが推測できる。その意味で順接型や添加型の接続詞が訳出されない確率が比較的高いということは直感的に納得できる結果といえる。一方、翻訳の際に省略されにくいのは逆接型の接続表現であった。逆接型の接続詞は前件からは予想されないような内容が後件に続くことを前もって知らせる表現であるため、翻訳の際にも省略されにくいことが想像される。また、逆接型は読み手の注意をひく表現でもあることが予想され、社説においては後件に強い主張が述べられることも少なくない。逆接型の接続詞を訳出することにより、このような表現効果も訳出されている可能性がある。

出現率の上位のものを見る限りでは、英訳されたことによる接続表現の使用量に大きな変化はなかったように思われる。いずれの出現箇所においても、日本語では出現率順に「しかし」「だが」「また」の出現率が高く、英語では *but*, *however*, *and* の出現率が高かった。つまり、同じ情報が、英語という言語を用いて書かれた場合、接続表現の出現数には多少の変化がみられたものの、マクロ的な論理構造において使用される接続表現に目立った変更はなく、接続表現の文章中における役割全体としては大きな違いはないものと推測される。ただし、個々の接続表現について日本語と英訳とを対照させてみると、その機能は必ずしも一対一という単純な対応関係にはなっていない。対応関係がずれるところに日英語の接続表現が担う機能の異質性が観察されるのであるが、紙面の都合上、このような質的な分析については別の機会に論じることとする。

3.2 調査2 文の接続—日英語の社説において—

調査2では朝日新聞の社説56文章と *The New York Times* の社説56文章中の接続表現を分析した。文の接続を担う接続表現について日英語ともに市川(1978)の文の接続類型による分類を試みた。【表3】にその結果をまとめた³⁾。

第1位および第2位は日英語ともに逆接型と添加型で共通しており、また出現率の低いものとして補足型、転換型が挙げられるのも両言語に共通した結果となっている。第3位から第5位までの順位は前後するものの、データそのもの

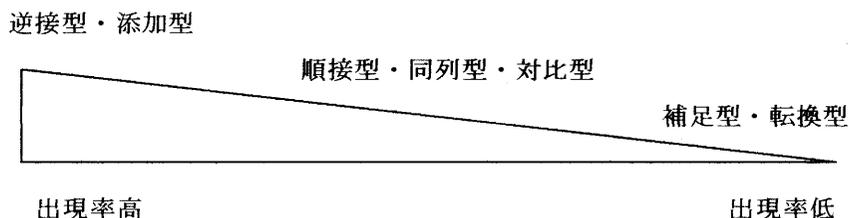
*5 各類型に分類される個々の接続表現の出現傾向については拙稿(1993)、日本語の接続表現の出現傾向の分析に関する詳細は拙稿(1995)を参照されたい。

【表3】日英語の新聞社説における接続表現の接続類型別出現傾向

	朝日新聞	The New York Times
第1位	逆接型 (43.05%)	逆接型 (36.46%)
第2位	添加型 (20.20%)	添加型 (31.56%)
第3位	順接型 (13.91%)	対比型 (11.09%)
第4位	同列型 (10.60%)	順接型 (9.38%)
第5位	対比型 (8.61%)	同列型 (4.05%)
第6位	補足型 (1.99%)	補足型 (3.84%)
第7位	転換型 (0.66%)	転換型 (0.85%)

()内は接続表現総数に対する割合を示す

【図1】日英語の新聞社説における接続表現の出現傾向



のの数値が低いことからそれらの間に有意差があるとは考えにくい。従って、日英語の社説における接続表現の出現傾向をまとめると【図1】のようになる。日英語の接続表現の接続類型別の出現傾向は大きく異なるものではなく、接続表現によって明示される社説の論理構造は、日英語である程度の普遍性をもつものである可能性が窺いしれる。

4 結論

本研究では日英語の社説における接続表現の出現傾向についてみてきたが、以上の考察からその出現傾向は日英語である程度共通するものであることが明らかとなった。日本語の社説における接続表現の出現傾向は調査1と調査2ともに、逆接型に次いで添加型の出現率が高く、転換型の出現率が最も低かった。これは佐久間(1974)の調査結果とも一致している。表現別にみると「しかし」「だが」「また」の順に出現率が高い。一方、英語の社説においても同様の傾向がみられ、調査1の英訳された社説においては逆接型の接続表現である *But*, *However* や添加型の *And* が多出している。調査2の *The New York Times* の社説

においても *But*, *Yet* などの逆接型の接続表現、添加型の *And* の出現率が高く、転換型の接続表現の出現率が低かった。調査 1 と調査 2 の英語の接続表現の分析において共通した出現傾向が観察されたことから、英語の社説における出現傾向は資料が翻訳されたものであるか否かに拘わらず、逆接型、次いで添加型の接続表現の出現率が高いことが明らかとなった。さらに、この出現傾向は日本語の社説における接続表現の出現傾向とも一致することが確認された。

5 おわりに

本稿では日英語の社説における接続表現の機能をその出現傾向の比較という観点から分析したが、今後は文章全体の論理構造に密着したところで個々の接続表現の機能を分析していく必要がある。また、句を接続する接続表現の日英比較分析からもいくつかの示唆が得られたが、これについては稿を改める。

参考文献

- 市川孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版
樺島忠夫・寿岳章子 1965『文体の科学』綜芸舎
佐久間まゆみ 1974「新聞社説における段落区分の形態特質について」『国文』第 40 号 お茶の水女子大学国語国文学会
佐久間まゆみ 1979「女性の論理と文章—月刊誌巻頭随筆及び入社試験小作文における接続語句使用の男女比較の試み—」『女性と文化—社会・母性・歴史—』白馬出版
佐久間まゆみ 1983「文の連接—現代文の解釈文法と連文論—」『日本語学』2-9 明治書院
佐久間まゆみ 1992「接続表現の文脈展開機能」『紀要』41 日本女子大学文学部
永野賢 1986『文章論総説』朝倉書店
西原鈴子 1990「日英対照修辭法」『日本語教育』72 号 日本語教育学会
西由美子 1993『新聞社説における接続表現の一考察—日英語の比較対照—』平成五年度提出卒業論文 日本女子大学
西由美子 1995「新聞社説における接続表現の出現傾向」『国文目白』第 34 号 日本女子大学国語国文学会
西由美子 1998『新聞社説における接続表現の日英対照研究』平成九年度提出修士論文 お茶の水女子大学
Quirk, R. & Greenbaum, S. 1973 *A University Grammar of English*, Longman
Schiffrin, D. 1987 *Discourse markers*, Cambridge University Press
『新英和大辞典』1980 (第 5 版) 研究社

((社) 国際日本語普及協会)